

創刊のことば

望田幸男

「ドイツ現代史研究会」（以下「研究会」と略記）の研究雑誌『ゲシヒテ』が創刊されることとなった。すばらしいことである。「研究会」創設以来、四〇年近く経ったいま、いわば「研究会」第三世代ともいべき若い世代が中心になって、この事業が担われようとしているからである。このような事業が開始されるにあたり、「研究会」の創世記ともいべきことについて書き記し、創刊のことばに代えたい。

どんな組織・団体でもルーツをさかのぼって詮索していくと、あいまい模糊としてくる。関西に拠点をおく「研究会」の創設の頃といえ、一九六〇年代末から七〇年代初頭のことである。学界動向の面からいえば、フィッシャー論争の後を受けて、「ドイツ社会史派」の胎動が感知されつつある頃であり、社会的には「大学紛争」の旋風が吹き荒れていた時期であった。そんななかで生まれた「研究会」は、今日では百名を超えるようになっていくが、初発のころはせいぜい十名程度であり、ドイツ現代史研究会という名称を冠するようになったのが何時からかは、正確なところはわからない。一九六〇年代の関西ないし京都には若い研究者や院生などが出入りしていた一種のセンター的でリーダー的な人物として、大野英二氏（京都大学経済学部）と脇圭平氏（京都大学法学部）がいたが、「研究会」のルーツはと問われれば、これら両氏と接していた人びとのなかで、ほぼ三〇歳代のもの数名が集って、六八年初頭、研究会を始めたのが発端といえよう。そ

のメンバーとはいえば、木谷勤、中村幹雄、末川清、野田宣雄、山口定、栗原優、豊永泰子、望田幸男などであり、後年「研究会」メンバーのなかで「アルテ・ケンプファー」と「俗称」されるようになった人びとである。ほどなく、科学研究費補助金を申請しようということになり、申請テーマは「第三帝国の権力構造」とし、申請責任者には脇圭平氏を推薦した。

発足時にまずコンセンサスを図ったことは、「研究会」にはいわゆる文学部史学科出身者だけでなく、経済学部や法学部の関係者などにも広く開放していく、ということであった。その際に問題になったことのひとつは、今後、「研究会」に参加を呼びかける範囲は…ということであった。これについては、私が提案したので記憶にのこっているのだが、「だれびとにも呼びかけず、だれびとの参加もこぼまず」という方針でいくことになった。こうしたことが「研究会」発足時に議論になったのは、「研究会」が特定の人脈や特定の学派の結集ではなく、あくまで自由で、そして先端的な研究交流の場でありたいという想いからであった。

さて、こうして発足した「研究会」は、大学紛争などによる中断の時期をはさみつつも、月一回程度の研究会を重ねていった。それも、可能な限り広い文脈で研究を進めようと、たとえば木坂順一郎氏に日本のファシズムに関する報告を依頼したりした。こうしたなかで「研究会」の最初の共同作業として実ったのが、エルンスト・ノルテ『ファシズムの時代——ヨーロッパ諸国のファシズム運動1919-1945——』上下（福村出版、一九七二年）の翻訳出版であった。この翻訳作業は、脇、木谷、中村、野田、山口、栗原諸氏に加え、平井友義氏の参加のもとに七名があたった。そこには、ドイツ・ファシズム研究

を各国のさまざまなタイプの考察のうえに比較史的に推進していこう、という願いがあった。

「研究会」の大規模化は七〇年代中頃に起こった。私がドイツ留学に旅立った七五年三月には、まだ一〇数名程度のメンバーであったが、一年有半後に帰国して驚いたのは、会員数の激増だった。それは大野英二氏を中心とした経済史関係の人びとや上山安敏氏を中心とした法制史関係の人びとの参加があったからである。この頃に関西における主だったドイツ近現代史研究者のかなりを会員として擁するに至った。さて、こうして会員の急増を遂げた「研究会」は、会内部における自由な研究交流にとどまらず、全国的な、さらに国際的な研究交流も推進していった。まず前者からいえば、西川正雄氏を中心にした東京方面のドイツ近現代史研究者たちとの交流である。それは、七六年に東京の八王子セミナーにおいて合宿方式でドイツ現代史に関する「放談」をする、というこゝろで始まった。やがて関西でも開催を受け持つようになり、ほぼ一年交代で開催責任を引き受け、東京方面と関西との交流集會が定着していった。こうした趣旨で始まったものであるから、この交流集會には「固有名詞的」なものもなく、けっして「学会」を作るつもりも毛頭なかった。ところが参加者数も増えていくなかで、「学会名」がないと出張旅費の請求が認められないという声もあって、「ドイツ現代史学会」と「簡稱」するようになったのである。したがって、すでに三〇回目を超え、文字通り全国規模のものとなつているにもかかわらず、この「学会」には、学会代表も恒常的事務局も存在せず、その都度、次回ないし次々回の大会組織責任者ないし責任校を決めるというやり方をとつていたのである。これもどんな人脈もどんな学派も超えて、自由な研究交流の場であらうとした

「研究会」の精神と合致するところである。

次にドイツとの国際交流に関していえば、当時は東京や大阪のゲーテ・インスティトゥート（ドイツ文化センター）を窓口として、芸術家や文学者・作家などの招聘が多かった。そうしたなかで歴史家を呼び、日独の研究交流を推進しようと、東京グループと連携して、招聘学者の希望リストをドイツ側に提示するようにした。こうした交流を通じて、七〇年代中頃から八〇年代初頭までに来日した歴史家たちのなかには、M・ブローシャト、H・U・ヴェーラー、H・A・ヴィンクラ、J・コツカ、W・J・モムゼン、H・モムゼンなどがいた。これらを一瞥するだけで、この当時の「研究会」のなかにみなぎつていた熱気を感じることができるであろう。次いで「研究会」の大きかりな共同作業として、H・U・ヴェーラー編『ドイツの歴史家』一〜五巻（未來社、一九八二〜八五年）の翻訳出版があったことを挙げておこう。これは三〇名になんなんとする「研究会」メンバーの参加のもとに遂行されたものである。

以上に垣間見たように、七〇年代から八〇年代にかけて、「研究会」は定例研究会とともに、全国のドイツ近現代史研究者たちとの、そしてドイツの研究者たちとの研究交流を定着化させてきた。そこには、どんな人脈も、どんな学派も超えて、自由で先端的な研究交流を主眼とする、という発足当時の初心が貫かれているように思われる。『ゲシヒテ』の創刊が、こうした「研究会」の歩みの延長線上に、新たな実りを見せることを願ってやまない。

付記

本稿では、「研究会」の創立記から一〇数年間のことを紹介したが、その後の歩みの転機ともいうべきことについて付言しておきたい。それは、一九九〇年代中頃にはつきりと見られることである。実は、それまでは「研究会」の代表などは、主として創立期のいわゆる「アルテ・ケンプファー」の回り持ちのようにやってきたが、この時期に、だれの発案ともいうことなしに、「アルテ・ケンプファー」は総退陣し、次の世代にやっってもらおう、ということになった。そうした動きの最初が、九六〜九七年の井上茂子さんの代表就任である。この頃には、諸大学の大学院拡充の動きもあつて、「研究会」メンバーに大学院生の加入が顕著になっていた。そして「研究会」も若い世代の発表が目立つようになり、いわば新風が吹き始めたのである。それから一〇年あまりが経ち、『ゲシヒテ』の発刊を機に、「研究会」も第三期を迎えたようである。

(もちだ ゆきお・同志社大学名誉教授)

